水木学区のあらまし

奈良時代の初めに編纂された常陸国風土記（西暦717～723）には密筑の里（現在の水木）について次のように記されている。「村の中に浄泉あり。俗に大井という。夏は冷ややかにして冬は暖かなり、湧きて流れて川に成れり。夏の暑き時、おちこちの郷里より酒と肴とをもたらして、男女会集いて休い遊び飲み楽めり」（原漢文）

このことからも水木地区が、気候温暖にして、物産の豊かな土地で、泉が森を中心として人々の交流の盛んだったことがうかがえる。

水木地区は、東は太平洋に面しており、海の幸を求める水産業や海水浴場として賑わってきた。また、中央の台地では農業が盛んで、米・麦等の穀物や大豆・さつまいも・野菜等の畑作物を生産しており、これらの出荷時には大甕駅前は大変賑わった。

しかし、昭和30年代の後半から、田や畑、平地林などに町工場や団地などが次々と建てられ、また、道路も整備されるなど、都市的な土地利用が図られ、人口も増加し、急速に都市化が進行して現在のような姿に変遷してきた。

水木地区の人口は10,555人、世帯数は3,698世帯（平成10年10月1日現在）である。現在、農業や水産業で生計を立てている家は少なく、会社員や公務員が多い。また、女性の社会進出にも目を見張るものがある。そういう中で地域の絆をより強め、住民の和を図るため、市民運動推進会が中心になり「ふれあい、助けあい、語りあい、認めあい」を合言葉に活力ある地域づくりを進めている。

文化財

◆ 泉が森 ◆

JR大甕駅より東北約1kmの所に、こんもりと生い茂った常緑樹の森がある。この森が泉が森である。森の中には、清水がこんこんと湧出している泉と、水木の氏神を祀る泉神社とがある。泉が森については、奈良時代に編纂された常陸国風土記にも「密筑の里の浄泉」として記されているところから、茨城県指定の史跡になっている。また、茨城百景にも選ばれている。

泉は、水底から青白い砂をもくもくと吹き上げながら清水を湧出している。昭和40年ごろの湧出量は毎分約3,000ℓといわれたが、現在は半減している。池は、東西に長い楕円形をしており、周囲は約50mほどで最も深い所は約2mある。池の中央には弁財天を祀る祠がある。泉が森は、四季折々の風情豊かであり、特に夏は涼を求めて集う人が多い。

最近まで泉が森の北側に養魚場があってニジマスが養殖されていた。現在この跡地を日立市により水公園（仮称）にする計画が進められており、近い将来市民の憩いの場所となることが期待されている。また、ひたち市民オペラ「水の声」は、泉が森を舞台にしたものである。

◆ 水木ささら ◆

水木ささらは、泉神社の祭礼の際、露払いとして神輿を先導し、村の五穀豊饒、浜大漁及び村人の安泰を祈願するものとして古くから「向町」が継承し、県の無形民俗文化財に昭和45年指定された。現在は後継者の問題から、泉神社の氏子を主体とした水木ささら保存会に引き継がれ、保存伝承されている。

「ささら」は、大獅子、中獅子、雌獅子と、ざいをもった2人のしゃぐま（射子舞）の5人が笛に合わせて太鼓を叩き、ざいを振りながら一庭30分、12の演技を勇壮に摺り舞うものである。それに美しく着飾った稚児数名が金棒を持って鈴を鳴らし、ささら舞いを引き立てる。この金棒引きは、他地区にはない水木ささら独特のものである。

神社とお寺

◆ 泉神社 ◆

泉神社は泉が森の中にあり、崇神天皇の御代に鎮祀されたと伝えられている。御祭神は天速玉姫命である。平安時代中期である延喜5年（905）に編纂された「延喜式」の神社帳にも載っている日立市内において最高の格式と最も古い由緒ある神社である。

鎌倉時代から東国の武将達が崇敬し、特に佐竹藩や水戸藩の信仰が篤く、その庇護を受けた。享禄3年（1530）の棟札には、佐竹義篤が神社を改修したことが記録されている。

社殿は何回か火災で焼失したが、代々の氏子に護られ篤く信仰されてきた。現在の立派な社殿は昭和35年（1960）に焼失したものが、昭和58年（1983）に再建されたものである。

◆ 吉田神社 ◆

御祭神は日本武尊と誉田別尊で、延暦14年（795）の創建と伝えられている。

最近、棟札群の学術調査が行われ、吉田神社の棟札は、応永20年（1413）を上限とする貴重な歴史資料であることが明らかになり、平成7年日立市の文化財に指定された。

棟札は、棟上げの時、工事の由緒、建築年月日、寄進者、社殿の建立・修復や祭礼に携わった関係者を記した札で、当時の歴史を考えることができる貴重な資料である。昭和42年に本殿、拝殿の修復が行われたが、応永の社殿再建から600年の歳月を経た今日でも、変わることなく森山町の氏神様として地域の人々に篤く信仰されている。

◆ 日輪寺 ◆

来迎山寶珠院日輪寺は、森山町3丁目にある真言宗の古刹である。平安初期この地を巡錫した弘法大師は、太平洋を真紅に染めて昇る巨大な日輪の姿にうたれて一庵を結び、日輪寺と名付けたといわれている。

室町期に中興され、江戸時代には除地17石、末寺11か寺を支配して隆盛を誇った。元治元年（1864）水戸藩に起こった天狗諸生の乱で一切を焼失し、明治中期に再興された。

現住職は第59世。約一千の檀信徒が折々に参詣する境内には、子安地蔵、水子地蔵、弘法大師修業像、救世観音像、十二支守本尊等が立ち並ぶ。また、室町期の不動明王図、十王図、五大尊図、十二天屏風などの寺寶がある。

名所と史跡

◆ 水木浜 ◆

水木浜は、海がきれいで広い砂浜のある海岸として知られている。常陸国風土記の泉が森の記述の中に「其の東と南とは海浜に臨む。アワビ、ウニ、魚貝の類甚だ多し」とあり、古くから海の幸に恵まれていた。

戦前までは、沿岸漁業が盛んであったが、次第に衰退し、現在はアワビ漁だけが行われている。また、砂浜も広く、遠浅で水もきれいなため、海水浴場としても知られ、海水浴旅館も十数軒あった。

現在は海岸道路が通り、交通の便はよくなったが、北側には護岸とテトラポットが並べてあり、砂浜は大分狭くなっている。しかし、現在でも春は潮干狩に、夏は海水浴に、多くの家族連れで賑わっている。

◆ 田楽鼻 ◆

水木海水浴場の南側に海中に突き出た岬がある。ここが田楽鼻である。海蝕崖で高さ22m余りあり、崖の上は平坦な台地になっている。この台地を地元では田楽原と呼んでいる。現在この一部は公園になっており、金砂神社大祭礼の記念碑等が建っている。

田楽鼻の由来は、東金砂・西金砂の両神社が磯出という神事の際に、この場所で田楽舞を奉舞することから名づけられたものである。

磯出は神の出現を再現する意味があり、金砂神社の神はアワビの小舟で水木浜の磯に現れたと伝えられているところから、73年毎に水木の浜に磯出する大祭礼（大田楽）が行われる。次回は平成15年（2003）が水木浜で金砂神社の磯出大田楽が行われる年になっている。

◆ 水木御番所 ◆

水戸藩では、尊皇攘夷思想のもとに、藩内の海防に力を入れ、助川海防城と共に水木にも遠見番所を設け、異国船の見張りにあたらせた。

水木御番所のあった場所は田楽鼻近くで、現在水木1丁目の河村氏の屋敷地内に「水木御番所跡」の碑が立てられてある。

◆ 藤田東湖の詩碑 ◆

泉が森の泉の西側に「泉が森納涼の詩」の碑が建っている。

この詩は、藤田東湖（徳川斉昭の側近で水戸学者）が、安政2年の江戸大地震で亡くなる2年程前に泉が森を訪れた時、「真夏の暑い日でも、この泉に佇むと、ここは秋のようだ」（原文は漢詩）と詠んだ詩である。

この碑は大正4年に泉神社の修復を記念して建立されたもので、徳川頼倫の書で仙台石に刻まれている。

◆ 森山一里塚 ◆

慶長9年（1604）に徳川家康は江戸日本橋を起点として、一里を36町と定め、五畿七道のすべての沿線に一里塚を築かせた。

森山の一里塚は、岩城相馬街道時代、森山宿の北のはずれ（現在の森山町2丁目の国道6号沿い）に築かれており、数百年も街道を旅する人々の灯台の役目を果たしていた。

国道の拡幅工事のため、当時のものは撤去されたが、現在はその近くに「一里塚跡」と刻した記念碑が置かれている。